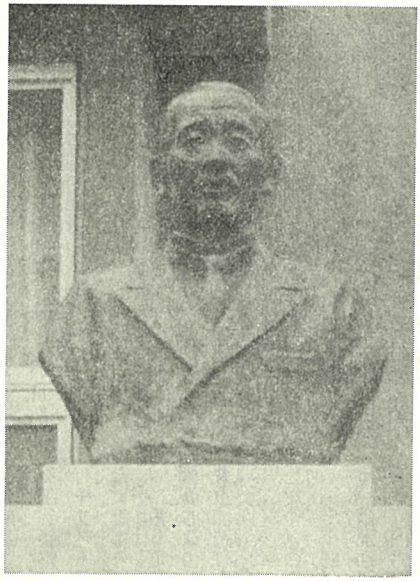


同志社人物誌（43）

井上浦造

萩原俊彦

一

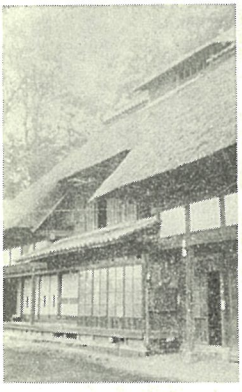
井上浦造（一八六七～一九五二）は、上州より新島襄存命中の同志社に学んだ無名の教育者である。同志社百年の歴史のなかで、その存在を知る者は僅少に過ぎぬだろう。幸い私は、故柏木寛吾氏に推められ、井上浦造の足跡を調べることが出来た。校友の活躍ぶりに常日頃関心を抱く地方在住校友の好意による以外、「無名の同志社人」を発掘しその軌跡を民衆史的に位置付けるなど、困難なことではなかろうか。同志社は著名人を輩出しなかった処にむしろ教育の特色があると云われてきた。しかし昨今の同志社人物史研究は、各界の名士的存在になった人々の調査・紹介に力を注がれているようだ。私が「無名の同志社人」に関心を抱くのは、かかる現状に対する不満からかも知れない。特に上州の同志社人を見ると、無名人の多さに驚かされる。後世に著名人とされたのは、湯浅半月、深井英吾、松本亦太郎などわずかに過ぎない。それ以外、郷土の先覚者・進歩的思想家としての新島襄にあこがれ、笈を負って同志社へ進学した上州の青年は、中央各界で活躍することなく帰郷し、地方社会の進歩的なリーダーとして人々に奉仕し、人格的な感化を与える者が多かった。北毛農商銀行や尻高牧場を経営した有馬嘉市、甘楽第一教会員の自小作農で地方農村の改良や農業会の運営に尽力した黒沢長吉などがその好き例である。しかもかれらは、新島の葬儀の折に棺を担いで若王子山頂に登ったことを人生最大の誇りとして周囲の人々に語っていた。

これらの青年が地方社会の進歩と改良に献身したのは、家業との係わりもあろう。さらには、郷土の偉人新島襄との接触や同志社教育で受容したピューリタニズムを、その生涯に何らかの形で貫いた結果であるといってよい。荒寥とした上州の山野に朽ちた校友には、一粒の麦たるにふさわしい生き方があっ

たのである。井上浦造もかれらと共通する軌跡をたどった人物であった。ただ、キリスト教信仰を持ちながら前橋教会を除名された一事を除いては……。

二

井上浦造は赤城山南麓・群馬県勢多郡宮城村馬場の人である。その村には上野国二の宮赤城神社が鎮座し、古来より村人はその祭神を精神生活の軸として生きてきた。冬の異常乾燥が特にきびしく、凍結した青空に赤城颪が身を食い裂くように吹き巻く村である。それゆえ、赤城の神に心を託し、きびしい自然に耐えてきたこの村出身の人物には、思想や人生コースの差異はともあれ、上州人の烈しさが集中的に表現されているようだ。侠客大前田英五郎、関東軍参謀東宮鉄男などの風貌に、その性格がにじんでいよう。どこか漢学者風で温厚朴直、とても激情的な行動派とは思えぬ井上浦造とて例外ではなかった。教育事業に対しては、常に烈々たる気迫をもっていたと伝えられている。


井上浦造の生家

井上浦造は田畑約一町歩を経営し、地侍をその祖とするらしい中堅自作農の長男として成長した。本来ならば跡取り息子として農業に専念すべきであったが、体力的に不向きであった。そのため、小学校を卒業するや、国学を講じ教派神道に仕える郷学者斉藤多須久に師事し、さらには前橋へ出て漢学を主とする幽谷義塾に学んでいる。

キリスト教との出合いは、その頃つくられた。ところで、組合キリスト教会の前橋伝道は、和田正幾や蔵原惟郭を承け継いだ海老名弾正により本格的になされていた。偶然にも井上浦造は海老名の説教を聞き、キリスト教に近付くことになったのである。彼はその回想をつぎのように綴っている。

「……郷学者斉藤多須久同伴にて前橋へでる。破邪顕正仏教大演説会に参加した。その帰り町内紺屋町にあった会堂の前を通った。……略……フロック姿の長身美髯の先生が右手高く天をさして、『諸君宜しく天にゐます誠の父を見給へ』と疾呼された。……略……『誠の父を見給へ』の一語こそ、今日に至るまで私の心を離れることのない印象であります。……略……爾来五十余年、故先生の説教を聴し事も何度かあったが、前述の教会門外にて聴きたる一事は生涯忘れることが出来ません。」（新生命四六六号・海老名追悼号）

海老名の一言は、井上浦造の心に強く焼き付き、ここに回心をもたらすことになったのであろう。明治二二年二月六日に、彼は不破唯次郎牧師より受洗する。その当時、前橋教会は盛況を極め会員も百名を越えていた。それも不破唯次郎が就任して後数年間に受洗した者のみで二七名を数え、そのなかには住谷八朔（天来）や井上浦造が含まれていた。間もなく伝道戦線は井上の居村とその近隣へも拡大し、ある町では一時に三〇名が入会したという。かれらが、近代思想や文明に憧憬を抱く田舎紳士層であったことは申すまでもない。この伝道は旧前橋藩士族田中耕太郎（神戸女学院元教授・故田中左右吉の父）の担当するものであったが、地域の事情に詳しい井上もこれを支援したことであろう。さらに前

橋教会は、青年五名を神学校へ送ることとなった。うち一人が神戸女子伝道学校へ行った他、四人は揃って同志社へ進学する。その一人が井上浦造であった。その当時、前橋教会の青年は一〇年以内にキリスト教国が日本に実現するとの確信を抱いていた。牧界を志望した井上浦造はその責任の重さを痛感していたことであろう。なお、彼の同志社進学には、新島襄との出合いや人格的感化が大きく影響していたようである。すなわち彼は伊香保や前橋に滞在する新島を訪ね、何かと教えを乞うていた。その折に彼は新島の人柄や思想に強く打たれ、自ら願い出て同志社進学を許されたのであった。

この後同志社在学中の井上が如何なる生活を送ったかはわからない。しかし、上州より在学する四〇数名の学生と共に、郷里教会の期待に答え、地上に神国をの抱負をもって研鑽を積んでいたことであろう。同郷の先輩格にあたる柏木義円との接触も始められ、以後両者の交際は、上毛（又は毛武）の校友会で続けられることとなった。

三

同志社卒業後、井上浦造は帰郷して、前橋教会など上州各地で伝道に従事する。特に上越国境に近い寒村の須川教会や東上州館林の開拓伝道が主な任務であった。とりわけ、村内にギリシア正教会をもつ須川の場合、これと競合関係にあったから教会を維持することは至難の技であった。ところで井上浦造は、困窮と闘いつつ独立自給を求めて伝道を続けていたが、次第に信仰と科学との融和し難い矛盾に悩むようになった。特に、キリストの再臨を科学的に根拠付けうるか否かをめぐり煩悶の日々を送ることが多かった。ついに彼は伝道生活を中止し、以後、教育者となり、明治三十三年には、足尾銅山街道の宿場町で在郷町的性格をもつ山田郡大間々町に、共立普通学校を設立したのであった。その町は、いずれかの公立中等学校へも通学不能の地であった。井上浦造はあえてこの地に校地を求めたのである。

その経営は最初から苦しかった。井上浦造は、県に私立中学校設立認可を申請したがみとめられず、そこで中等程度の教育を行なう三年制の共立普通学校を開校する運びとなった。ときに新入生はわずか一三名であった。

なお共立普通学校なる校名には、教師・生徒の共同で学校を育てあげること、特権的身分を求めず普通人であることに誇りを持ち、日常生活のなかでデモクラシイを生かしうる農村のリーダーを育成せんとの願いが込められていた。それゆえエリートコースを求める県立中学校とは、およそその性格を異にしていたものといえよう。それに加え、慶応普通部や特に同志社普通学校の校名に着眼し、「同志社」的精神を「共立」の二字で表現したことはよく知られている。ここに井上浦造は、上州の教育界に在職した校友伊庭菊次郎や周再賜との交わりを持ち、一時は住谷天来を講師に招いて教育を進めていった。

ただし、同校はキリスト教主義学校ではなかった。それは井上浦造が地域社会と住民の精神状況を配慮したためであろう。赤城山南麓では村共同体の支配が強くてキリスト教信仰が定着せず、信者の多くが後には棄教して神葬祭に復帰するなど、伝統への回帰を求める空気が強かった。そのため、キリスト教主義を掲げたのでは学校を維持することが困難

であると考えられたことだろう。同時に井上浦造の信仰が組合キリスト教会の正統から次第に離れたこともその理由としてあげられる。彼は集中伝道の折知己となった松村介石の思想に傾倒していった。そのため、学校に松村介石を招いて講演会を催したり、年によっては月に一度道会本部から詩吟や道話の講師を招いたこともあった。時には井上自身が生徒を伴って道会本部へ赴いたり、生徒を介して道会雑誌を配布するなどの活動をもなしていた。かかる行動を不審視したのか、大正九年十二月前橋教会は彼を除名処分に付している。前橋教会々員名簿には「井上浦造・大正九年十二月除名ス（松村介石派）役員会」とそのことが銘記されている。

ここに前橋教会は二人目の除名処分者をだすことになった。他の一人は高畠素之で前橋教会規約に反し、社会主義の主張と実行をなしたためこの処分をうけていた。前橋教会で育ち同志社に学んだ二人のキリスト者が、その思想信条を異端視されて除名とは皮肉としか云いようがない。ましてや右翼血盟団を結成した井上日召は除籍にさえなっていない。果して二人の処分は妥当なものであったのだろうか、或は前橋教会の体質が保守化していたのかどうか一考を要するところである。ただ高畠が棄教したのに対し、井上浦造は煩悶しつつも信仰を捨てなかった。しかし、教会への道は遠のき信仰を人に説くなどの情熱は失われていった。こうしたことがキリスト教主義を掲げぬ共立普通学校の設立と経営に彼を向かわせた理由であったろう。

共立普通学校は、設立以来三八年間にわたり経営されていく。そこで学んだ生徒は、同校より往復一五～二〇粁圏内に居住する中堅的な農民の子弟であり、特に長男が多かった。すなわち、学力の高低はとも角、下宿生活をして地方都市の中学校へ進学させ得るだけの教育費を捻出し難い農家の子弟が多数徒歩通学をすることになったのである。そのため授業料も県立学校に比して安く、大正初年でも一カ月九〇銭を維持していた。

また創立期の共立普通学校は、井上浦造の個性がにじみ出た塾的な性格が濃厚であり、学校財行政も専ら彼の献身によって支えられていた。すなわち創立後数年間、同校の生徒数は四〇名にも達せず、明治三九年の新入生はわずかに九名、教師も三名という小規模で、年間経費は千円を下廻っていた。生徒数が一〇〇名を超えたのは創立一四年を迎えた大正二年のことであり、井上浦造はこれを喜び教員を一名増員したという。やがて昭和期に入ると四年制へと学校規模を拡大し、生徒数二五〇名、専任教師七名、年間経費八三七五円で運営される学校に成長する。まさに全国的な進学率の上昇と、母校を支える同窓会組織が強化されたこの頃になり、共立普通学校の運営はようやく安定したものといえるだろう。じつにそこにいたるまでの間、学校の運営はほとんど井上浦造の自己犠牲的な奉仕に依存していたのである。生徒募集のため、彼自らが草靴脚絆で村々を廻るなど珍らしくはなかった。教師給の支払いや県立学校以下の授業料水準を維持するための経理事務一切も、彼が担当した。そのため、彼は生家を訪ねては田畑を担保に借入金を導入したし、杉の大木を伐採しては学校経費を捻出することしばしばであった。

井上浦造の学識、人物をよく知る県教育会の人々は、経営に苦慮する余りその才能が磨滅するのを惜しみ、前橋中学校の要職へ彼を招請したこともあった。しかし、彼は「農村

の子弟育成」の教育理想を捨てなかった。献身と自己節制により共立普通学校を守りぬいたのである。事実彼の住居などあたかも宿直小屋を思わせるものであり、自給と節倹に徹した彼の生きざまをしのばせていた。

幸いにして井上浦造は「月給半減論」を唱える同校の教師や、妻藤子の授助に支えられどうにか苦境を乗り切っていった。特に藤子（旧姓釘本・熊本県出身）は同志社女学校卒業にふさわしく英語が堪能であった。県の要請があれば日光に赴き外人相手の通訳を引き受けたほどであったらしい。その語学力を巧用して、彼は藤子を長期間無給講師として登壇させ、同校の語学教育を充実させたのである。

塾とも云うべき共立普通学校の運営を通じて井上浦造は「教育は金や贅沢ではない、精神だ」との確信を強めていった。校舎も校具も粗末なものではあったが、在校生に対しては「郷土の柱となって社会に奉仕すること、貧者の一灯たるべき人間たれ」を強調して止まず、教育への熱意を燃やしていた。また教育愛の実践として「生徒に対してはあくまできびしくかつ親切」との方針に徹していた。だから、生活難にあえぐ生徒を引き取り通学させたこともしばしばであった。

昭和一三年、井上浦造は老境に達したことを理由に共立普通学校を退き、同校は町立農学校として再発足する。以来、彼は悠々自適の生活を送り一九五二年に昇天した。享年八七才。その生涯は「前橋教会除名」という不幸？があったにせよ、新島を求めて同志社に学んだにふさわしい「一粒の麦」であり、「世の光」「地の塩」としての責務に徹していた。彼の薫陶を受けた卒業生は、老いたいまなお、村長、村会議員、教育委員として、農村の改良と新しい村づくりのために励んでいる。

（同志社香里中高教諭・社会科）

後記　本稿執筆にあたり、井上玉男・上野丑之助、斎藤良太郎の諸氏のお世話になった。誌上を借りて感謝する次第である。

新島襄関係文献（抄）

“My Younger Days”　同志社校友会
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意―口語改記並原文―」　同志社
（森中章光編）「新島襄書簡集」正・編　同志社校友会
（同志社編）「新島襄書簡集」―岩波文庫　岩波書店
（J・D・デイヴィス著・九垣宗治訳）「新島襄の生涯」　小学館取扱校友会
「新島先生記念集」　同志社校友会
「明治文学全集第四六巻」
（新島・植村・清沢・綱島集）　筑摩書房
（T. D. DAVIS）「TOSEPH HARDY NEESIMA」同志社
（森中章光著）「新島襄片鱗集」　丁子屋書店
（森中章光著）「新島先生と徳富蘇峰」　同志社
（森中章光著）「新島襄先生詳年譜」　同志社校友会
「新島八重子回想録」同志社大学出版部
（徳富蘇峰著）「新島襄先生」同志社大学出版部
（魚木忠一著）「新島襄―人と思想」　同志社大学出版部
（岡本清一著）「新島襄」　同志社大学出版部
（同志社社史史料編集所編）「同志社九十年小史」　同志社
（和田洋一著）「新島襄」　日本基督教団出版局
雑誌「新島研究」　同志社新島研究会